議 事 録

会議名称	宇部市営旅客自動車運送事業審議会
開催日時	令和８年９月２４日　１５：００～１６：３０
開催場所	宇部市役所　本庁舎　３階　防災情報センター
出　席　者	委員（１１名）　出席　１０名　　欠席　１名 オブザーバー　　４名

■次第

１　会長あいさつ

２　審議事項

（１）　審議にあたっての前提条件

（２）　サービス水準の見直し方針（案）

（３）　特に意見をいただきたい論点

（４）　第３回審議会に向けた論点整理

３　連絡事項等

■議事

議　　題	（１）　審議にあたっての前提条件 （２）　サービス水準の見直し方針（案） （３）　特に意見をいただきたい論点 （４）　第３回審議会に向けた論点整理
発言内容	（主な質疑） Q1 高齢者の通院と買い物の頻度について、どちらも週 3 回以上乗車する利用者層で集計しているが、なぜ 3 回以上なのか。 そもそも通院も買い物もそんなに頻繁に行くようなものではないのではないか。 A1 週 3 回以上という明確な区切りはないが、バス事業者として週に半数近く利用される利用頻度の高い方は、それだけ必要性が高いから利用していると考えて設定している。 また、片道で 1 回とカウントするため、1 度外出して行きと帰りに利用した場合は 2 回となる。そのため、通院や買い物をするために外出している日数ではなく、バスに乗車した回数となる。 Q2 モバイル ICOCA に高齢者優待乗車証の機能を付加することはできるのか。 A2 現状は物理的なカードに発行機で情報を付加しているので、モバイル ICOCA に定期券や優待乗車証の機能を付加することはできない。 Q3 資料 P18 の非定期利用者について、山口宇部空港連絡バスを利用している方のデータは入っているのか。 A3 宇部市民の利用実態を捉えることが目的なため、山口宇部空港連絡バスのデータは入っていない。 （意見交換） 「高齢者の利用について」 【委員】 基幹病院への通院利用は IC 実績だと 5%程度だが、高齢者福祉に関するアンケートでは回答者の 4 割が通院でバスを利用していると回答しており乖離がある。 この乖離は、頻繁に通院する方は高齢者優待乗車証を IC カードに付与しているが、病院に行く頻度が月に 1 回程度と少ない方は、紙式の高齢者優待乗車証を IC カードに付与することを面倒に感じている方が一定数いることが要因なのではないかと感じている。 施策を考える前に、このような要因でデータ上表れない人がどの程度いるのか把握することが大事だと思う。

発言内容	例えば、配布された高齢者優待乗車証の数と IC カードに付与した数を照らし合わせたら、IC カードに付与していない人数が分かり、現金利用の高齢者がどの程度いるのか分かるのではないか。 【事務局】 IC カードを使っていない方のバスの利用実態を把握することが課題となっている。 病院に来られる方に対してアンケート調査を行うことで、IC カードを使っていない方のニーズを把握していきたい。 【会長】 買い物と通院で同じ週 3 回以上という基準で集計しているが、通院は月に 1 回程度の場合も考えられ、買い物の方が利用頻度は高いのではないか。買い物と通院でそれぞれ頻度の基準を変えても良いのではないか。 【事務局】 頻度を月 1 回に変えても通院での利用は 10%ほどしかなく、アンケートの 4 割とは乖離している。 小規模な病院に通っている方は乗降したバス停から通院目的の利用なのか判断することができないため、アンケート等で確認する必要がある。 また、小規模なクリニックに通っている方が多いのか、基幹病院に行きたいが行けていないのかなどをアンケートで把握していきたい。 【会長】 フジグラン、ゆめタウン等の大型のショッピングモールや、山口大学病院、中央病院等の主要な病院ではなく、小規模なスーパーや病院に行くためにバスを利用する人は動向をとらえることが難しい。 しかし、そういった利用層は無視できないくらい多くいらっしゃるため、そこをどうするか考える必要がある。 【委員】 山口大学病院はよく渋滞が発生しており、駐車場も満員で駐車できないときがある。そういった方たちに向けてバスの利用促進をした方が良いのではないか。 【委員】 高齢者の IC カード利用について、年齢層が分かったら分析がしやすいのではないか。 また、70 代の中でも前半の方や、病気をしていない健康な方が IC カードを利用しているのではないかと思うので、多くのデータを集めるために年齢が上の方に向けた IC カードの普及に力を入れた方が良い。 【事務局】 IC カードの利用率を増やすために、令和 7 年度から高齢者向けの乗り方教室を実施している。 内容は、高齢者の方がお集まりの場所に実際の路線バスと IC カードを発行できる出張販売機を持っていき、IC カードの利用方法を実体験していただいた上で、ご希望の方にその場で高齢者優待乗車証の機能を付与した IC カードをお渡しするというもの。

発言内容	1 回の参加人数は 20 人程度と小規模だが、参加したほとんどの方が IC カードを作成してくださる。 また、それをきっかけに利用し始めた方がお知り合いの方に広めてくださることもある。 今現在は、毎月 50～70 人程度の方が高齢者優待乗車証の機能を付加した IC カードを作っていただいている。 「高校生の利用について」 【委員】 1 学期でバスの利用をやめる人が多いとのことだが、その後はどのような手段で通学しているのか。 【事務局】 今年度、特定の学校に的を絞ってアンケート調査を実施する予定。 利用していない人の声を聞いて、ダイヤの問題ならダイヤ改正等で対応していきたい。 【会長】 朝の通学時は問題ないが、帰宅時に困難が生じる場合が多い。 特に試験期間やクラブ活動等でいつもと違う時間に帰る場合に丁度いい便がないという理由で公共交通機関を利用しない選択をしているのかもしれない。 「重点対応区分について」 【委員】 新川駅での待ち時間は、高齢者の買い物と高校生の通学ともに平均 12 分で、ダイヤの調整や待合環境の改善で負担軽減を図るとのことだが、そもそも利用者は 12 分を長いと感じているのか。 また、平均 12 分ということは 5 分の人もいれば 25 分の人もいるはずなので、平均ではなく分散がどうなっているのか知りたい。 【事務局】 待ち時間が 20 分以上になる割合は、高齢者が 26%、高校生が 18%となっている。 朝の 6 時～9 時までの貴重な時間の中で 20 分以上も待ち時間に費やしている現状があるため、改善の余地があると考えている。 【委員】 自分が学生の時は友達とゲームをしたり、英単語の暗記などをしていたらすぐに時間が経って、待ち時間が 20～30 分あっても意外と苦に感じていなかったので、高校生が本当に待ち時間が長くてつらいと感じているのかをアンケート等で調査する必要があると思う。 【会長】 平均 12 分と聞くと問題なさそうに感じるが、実際は待ち時間が 1 時間以上あるからバスに乗らないという選択をしているためデータに載っていない場合もあるのではないか。 施設側に調査の協力依頼をしてニーズを把握していった方が良い。

発言内容	【副会長】 バスはどうしても道路状況によって遅れが生じることもあるため、待ち時間が 5～10 分だと不安に感じてしまい、同じくらいの時間があるなら電車を選択していた。 また、行きはどのくらい時間を取れば大丈夫か読めるが、帰りは遅くなった時にバスの便がないと帰ることができなくなってしまうため、帰りを見越して、行きから自転車や車を選択していた。 【会長】 重点対応とされているものは比較的動向が把握しやすく、具体的な施策を打ちやすい人たちとなっている。しかし、見えていないが大事な層がある可能性もあるため、見えていないからといって何もしないということではなく、動向を把握するために調査をしている。 ここでいう重点というものはある意味施策の打ちやすさ、打ちにくさと捉えることもできるのではないか。 【事務局】 実利用者数が少ない層の方が行動パターンや目的、時間などが絞りやすく、対策を打ちやすいという点はある。しかし、利用者特性として「必要性」も重視している。高齢者や中高生は車を運転できないため、移動の手段としてバスの必要性が高いと判断し重点としている。具体的にはサービス水準を上げるために、高齢者の買い物や通院、高校生の通学を念頭に置いてダイヤを調整していきたい。 【会長】 実利用者数は少ないがトリップ数の多い高齢者や通学者等のコアな利用者を重視するのはもちろんだが、今回重点に設定していない非定期利用者を増やすための施策も進めていかないといけない。 【事務局】 バスは有用な移動手段であるという印象を持ってもらうことが大事だと考えている。 令和 7 年度から実施している「はな金バス」等で実際にバスに乗っていただき、バスが話題に上がることで、時にはバスを利用しようかと考えていただくことを狙っていきたい。 11 月 1 日の宇部まつりの日に実施する 100 円デーなどで試しに乗っていただくことで、次の利用への心理的なハードルを下げていきたい。 <u>「その他」</u> 【委員】 高齢者や高校生本人からの目線ではなく、親の介護や子育てをしている 40 代～50 代の意見として、バスを利用すれば運転する時間を仕事や家族との連絡などに有効活用できるため、本当はバスで通勤したいが、親を病院に連れて行ったり、大雨が降っていたら子供を学校に迎えに行く必要があるため、緊急事態を想定して車で通勤している。車が便利だから車で通勤しているのではなく、このような事情で車通勤している人がいることも考慮した方が良い。 また、親の病院と子供の学校の送迎を同時に両方とも行うことはできないので、往復でバスを利用するのではなく、必要に応じて帰りや行きのみ単発で利用してもらう場合がある。 そんな時に、学校終わりや、病院から帰宅する際の時間を案内できるツールが施設側に設置されていたり、施設側の職員が、バスに乗車するまでのフォローをできる環境があれば、高齢者や学生がバスに乗って帰ることができるようになるのではないか。

発言内容	利用者目線の意見だけでなく、通院している方の介添人や子供の親といった目線からの意見も取り入れるべき。 【会長】 車でないと対応しにくいニーズはある。公共交通という時間が決まっているシステムの中でどこまで利用者のニーズに応えることができるのか考える必要がある。 【事務局】 学校や基幹病院でのアンケート調査を通して運行頻度やダイヤを改善し、利便性を向上させることで、介添人や親御さん等の負担が少しでも減るようサービス向上に努めたい。 また、バスを必要としている方にどのように情報を届けるかというのも大きな課題であると認識している。 【委員】 まずは、現在バスを利用している方の満足度を上げるために、新川駅などで調査を行うべき。 また、需要が多いと思われるおのだサンパーク等の大型商業施設で、どのような便があれば行きやすいかヒアリングした方が良い。 （現時点では、宇部市営バスで直接おのだサンパークまで行くことはできない。） 現地調査を通して、ダイヤが改善されれば、子供が商業施設等に遊びに行く際に手分けして送迎している親御さんたちの負担も減る。 【会長】 待合環境について、近年の気候を考えると外で待つのはかなり過酷になってきている。 熱中症対策などを考えるとただ椅子があるだけの環境では厳しくなっている。

■次回予定

日時	令和８年１０月２６日(月)　10：00～
場所	宇部市役所　本庁舎　３階　防災情報センター
議題	受益者負担のあり方の検討